

都道府県・市・区

モデル圏域 北部圏域（多摩区・麻生区）

支援のすそ野を拡げることを目指して

※ 平成16年度から、長期入院者への退院の意欲に向けた働きかけを行う部署を行政機関の中に設置し、そこを中心に地域の相談支援事業所と地域移行を進めてきました。平成24年度からの総合支援法の個別給付化に伴い、これまで以上に相談支援事業所と連携を図り、地域移行を進める必要があり、そのための人材育成研修の取組を平成25年度より開始しました。平成28年度からは、事業実施体制の変更を行い、協議会については地域自立支援協議会の専門部会として開催しています。北部圏域をモデル地区として、地域移行・地域定着支援未実施の相談支援事業所に個別支援に従事してもらい、密着アドバイザーが支援の助言を行うとともに、不安の軽減を図る。また、病院と地域支援機関、ピアサポーターが協力し、院内プログラムを実施し、顔の見える関係づくりを進め、病院内での啓発を図る。

1 令和元年度の達成目標と現時点での進捗状況

令和元年度の達成目標	現時点での進捗状況
1. 地域移行支援未実施事業所の個別支援の実施 <u>目標値 4人</u>	<ul style="list-style-type: none"> ・3人の継続実施と共同プログラム参加者の個別支援実施に向け、院内外で調整中 ・他圏域での個別支援実施に向け、関係機関と調整中(対象者・密着アドバイザー)
2. 精神科医療機関と地域関係機関との共同プログラムの実施 <u>目標値10回</u>	<ul style="list-style-type: none"> ・5月から9月まで月1回実施し、計5回実施済み。 ・関係機関による意見交換会を3回実施
3. 居住支援協議会との共同企画の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・自立支援協議会専門部会にて、不動産向け普及啓発のための事例集作成に向け、検討中。

3 圏域の取組における強みと課題

【特徴(強み)】

川崎市を3つの南部・中部・北部の地域リハセンター圏域で見ると、それぞれの特徴がある。
 南部…万対病床数が少ない、中部…一部の区で地域移行の取り組みがある、北部…関係機関のネットワークが形成されている
 各圏域の特徴を生かし、構築支援事業を実施していく可能性がある。

課題	課題解決に向けた取組方針	課題・方針に対する視点別の認識(取組)	
支援のすそ野を拡げるために ・医療、地域関係機関相互の顔の見える関係づくり ・医療、地域関係機関職員を対象にした人材育成、バックアップ体制の充実 ・社会資源の充実、普及啓発	・川崎市地域自立支援協議会精神障害者地域移行・地域定着支援部会での取り組み ・長期目標、短期目標を設定し、4つのワーキンググループ(連携、人材育成、社会資源、居住支援)により取り組む	行政側	行政、医療、事業者、関係機関が一体となって取り組む
		医療側	
		事業者側	
		関係機関・住民等	
同上	・北部圏域(多摩区・麻生区)をモデル圏域と設定し、地域連携支援事業を継続実施し、検証する。 ・南部・中部圏域でのヒアリングとアセスメントの実施	行政側	行政、医療、事業者、関係機関が一体となって取り組む
		医療側	
		事業者側	
		関係機関・住民等	

課題解決の達成度を測る指標	現状値 (今年度当初)	目標値 (令和元年度末)	見込んでいる成果・効果
①地域移行支援未実施事業所の個別支援の実施	3人	4人	側方支援を受けながら、個別支援を実際に実施
②精神科医療機関と地域関係機関との共同プログラムの実施	9回	10回	ピアも含めた院内活動の展開
③居住支援協議会との共同企画の実施	—	—	不動産店向け啓発の検討、実施

3 病院（医療機関）との連携状況

平成30年度実施 市内精神科病院 地域移行支援対象者実態調査 自由記載より抜粋

①地域移行を進めていく上での課題

- ・ 高齢の対象者への支援
- ・ 退院に反対している家族の協力をどう得るか
- ・ 退院意欲のない対象者への支援
- ・ 退院先としての受け皿が少ない

等々

②地域移行を進めていく上での地域関係機関と連携した支援を行っていく上での課題

- ・ 信頼関係を構築する機会が少ない
- ・ 医療機関と地域関係機関との役割分担がわかりづらい
- ・ 支援のスピード感に差がある
- ・ どのような方がサービスの対象になるかわかりづらい

等々

3 病院（医療機関）との連携状況

平成30年度実施 北部圏域での地域連携支援事業従事者向け、モニタリングアンケート
抜粋

1 実施して良かった点

①個別支援について

- ・地域関係機関 協力体制が整い、連携が密にできていて安心
- ・医療機関 地域で生活していく上での具体的アドバイスが得られてよかった

②共同した院内外退院プログラムについて

- ・地域関係機関 互いに顔の見える関係が作れた、地域生活における働きかけに幅が広がる。
- ・医療機関 関わりのなかった地域支援者と関わられた、病棟スタッフには見られない意外な面が見られた

③アドバイザーがつくことについて

- ・地域関係機関 安心してできる、必要な時に相談が出来る、適切なアドバイスが得られた
- ・医療機関 目を向けたことのない視点に気が付いた患者様もいて良かった、役割の明確化

3 病院（医療機関）との連携状況

平成30年度実施 北部圏域での地域連携支援事業従事者向け、モニタリングアンケート
抜粋

2 実施しての課題

①個別支援について

- ・地域関係機関 地域「生活」に対してのそれぞれのイメージの違い、情報共有の難しさ
- ・医療機関 報（告）・連（絡）・相（談）の隙間 情報共有の難しさ

②共同した院内外退院プログラムについて

- ・地域関係機関 個別支援者に情報がきていなかった。情報共有の難しさ、チームアプローチの意識化
- ・医療機関 個別支援者にも、実際の場面を見てほしい

③アドバイザーがつくことについて

- ・地域関係機関 自分の役割や進め方を具体的に教えてほしかった。もっと意見が欲しかった
- ・医療機関 役割の明確化、会議の場以外でも意見を貰えたら良い

④全体的意見

- ・それぞれの時間・距離・思いの相違
- ・相談員同士の支え合い、専門機関からの後方支援があると心強い
- ・ピアサポーターの役割の明確化
- ・専門部会との連動の見える化

4 現時点での課題・悩み

支援のすそ野を拡げる、顔の見える関係づくりのために

1 北部圏域での地域連携支援事業から

- 地域関係機関と医療機関との情報共有と支援方向の一致
- 地域関係機関の支援者の拡大と院内へのプログラムの普及
- アドバイザーの役割の明確化
- ピアサポーターの役割の明確化

2 他圏域での展開をどう広めるか

- 北部圏域で実施しているプログラムの利用。
- 他圏域で展開するために、アドバイザーの確保。
- 基幹相談支援センターの役割。